

ピア・レスポンスにおける沈黙は何を意味するか

—沈黙明け行動の種類と可能性—

立見洗貴(名古屋大学大学院生)

1. はじめに： 問題の所在

ピア・レスポンスなどの学習者自身が主体となる授業においては、参与者間で活発に議論を行うことが求められるため、沈黙は言語活動の一時的な停滞と捉えられる可能性がある。実際、ピア・レスポンスなどの授業実践においては、やりとりが円滑に進んでいる箇所に焦点が当てられることが多く、一方で、沈黙は注目されにくい。参与者が独立して思考するための時間や、相手の話を聞いて意見を吟味するための時間として、沈黙の必要性は認められつつも、過度な沈黙を防ぎ、議論を活発化するために、司会役を立てる意義について論じた研究もある(胡, 2018)。

確かに、何度も長時間にわたって沈黙が生じると、議論がうまく展開されず、お互いの作文をより良いものにし、作文スキルを向上するというピア・レスポンスの本来の目的が達成されなくなる可能性がある。しかし、学習者が何を言うべきか迷っている過程や、必死に思考を巡らせている過程が、実際の会話の中で可視化できる形で現れたものが沈黙であるならば、沈黙そのものに注目する価値も十分にあるといえるだろう。本研究では、留学生同士のピア・レスポンス授業における話し合いを分析データとして、沈黙と沈黙明け行動に注目して分析と考察を行った。本研究の研究課題は、①沈黙の要因、②沈黙明け行動の種類と特徴、③ピア・レスポンスにおける沈黙の意味を明らかにすることである。

2. 先行研究

本研究と似た関心を有すると考えられる研究として、討論の行き詰まりに注目した水野・柴田・俵山(2019)、沈黙に「考えるシンボル」という意味を見出した武藤(2013)が挙げられる。水野・柴田・俵山(2019)は、討論における行き詰まりに注目し、行き詰まり後の話題展開について「話段」の観点から分析を行っている。その結果、討論が行き詰まった箇所では、「笑い」「沈黙」「感動詞」「沈黙に耐えかねた発話」の4つの現象が観察されたと指摘している。この研究は、沈黙が生じる箇所と関連があると思われる行き詰まりに注目し、特に行き詰まり後の振る舞いを分析している点で、本研究と同様の関心を有する研究だと考えられる。さらに、この知見を援用すれば、沈黙の要因(=研究課題①)の1つは、話し合いの行き詰まりだと考えられるが、この行き詰まり自体がさらに細分化可能なものであると考えられる。一方、武藤(2013)は、フランスで日本語を学ぶある学習者の、Web上で行われた日本語教育実践における、ある問いかけに対する18日間の沈黙の意味を、半構造化インタビューに基づく質的分析によって明らかにしたものである。分析手法は本研究と大きく異なり、注目している沈黙のレベルも同一ではないが、沈黙に「考えるシンボル」という「学び」につながる重要な意味合いを見出していることから、関心の方向性は共通していると考えられる。しかしながら、沈黙が生じた後、参与者がいかにやりとりを再開し、ピア・レスポンスという文脈の中で沈黙がいかなる意味を持っているかを論じている研究は、管見の及ぶ限りでは、見当たらない。

3. 調査概要と分析方法

本研究では、国立国語研究所日本語教育研究領域が公開している「日本語学習者のコミュニケーション研究」のデータのうち、「留学生ピア・レスポンス教室談話データ(以下、「教室談話データ」とする。)」を使用する。「教室談話データ」は、2015年9月から2016年1月にかけて日本国内の大学で行われた全15回(各90分)の授業において行われたディスカッションの談話が録音され、宇佐美(2011)のBTSJに従い、文字化されたものである。この授業では、全15回の授業のうちの8回において、ペア(2者間)あるいはグループ(3者間以上)でのディスカッションが取り入れられている。本発表においては、2者間でディスカッションが行われており、かつ、授業前後に執筆した論文の途中経過が提出されている第6回授業を分析データとしている。

本研究で注目するのは、沈黙と沈黙明け行動である。沈黙とよく似た現象に「ポーズ=間」がある。滝浦(2008)は、「発話の切れ目などに自然に短いポーズ(pause: 休止)が生じるが、沈黙(silence)はポーズよりも長く、発言権を取

ろうとする参加者がいないことが示される」と述べている。つまり、両者は、ことばが発せられていない状態の時間的な長さ、その間に発言権を取ろうとする参加者がいないという相互行為上の規則に基づいて区別されるものの、明確な基準によって線引きすることはできないということである。「教室談話データ」では、ことばをはじめとした音が何も生じていない箇所は、《沈黙～秒》や《少し間》という表記で表されているが、本研究では、このうちの《沈黙～秒》と表記されているもののみを分析対象とし、《少し間》については分析対象外とした。

以下、分析方法について述べる。①については、沈黙が生じた位置によって、「やりとり開始前」「話題の内部」「話題の切れ目」の3つに分類し、沈黙前後の文脈に基づいて沈黙の要因を特定した。沈黙の要因の特定にあたっては、

産出された具体的な発話の意味・機能、相互行為上の規則、語用論的な規範、前後の話題の関係などを手がかりとした。②については、沈黙明け行動、すなわち、「《沈黙》直後の第1発話」を、朴(2015)、張(2018)などを参考にして、発話者の役割別に4類30種の発話機能に分類し、分析を行った(【表1】)。③については、①、②の分析を踏まえて、沈黙と沈黙明け行動を含むやりとりの軌跡を記述し、さらに、授業前後に提出された論文の原稿を照らし合わせ、修正過程を観察することで、沈黙がピア・レスポンスという文脈において、いかなる意味を持っているかについて考察を行った。

【表1】沈黙明け行動の種類(発話機能)

発話の種類	A. 要求系		B. 提供・表示系	
	質問	回答	質問	回答
実質的発話	<ul style="list-style-type: none"> 質問 確認 言い換えによる確認 	<ul style="list-style-type: none"> 説明 具体化 補足 意見・意志の表明 返答 	<ul style="list-style-type: none"> 指摘・提案の要求 行為の要求 	<ul style="list-style-type: none"> 提案 判断 訂正 感想 関係づくり
非実質的発話	<ul style="list-style-type: none"> 開始 継続 承認 否認 確認 		<ul style="list-style-type: none"> 感情 感想 終了 同意 	
談話表示の発話	<ul style="list-style-type: none"> 話を始める 話を終わる 	<ul style="list-style-type: none"> 話を再び始める 話題のメタ的表示 	<ul style="list-style-type: none"> 話を進める 話を終える 	

4. 分析と考察

4.1 何を要因として沈黙は生じるか

【表2】ピア・レスポンスのディスカッションにおける沈黙の要因

グループ番号		G1-1	G1-2	G1-3	G2-1	G2-2	G2-3	G3-1	G3-2	G3-3	G4-1	G4-2	G4-3
開始前	個人的水準の活動		2	2	5	2	2	4	5	3	3	5	2
	コメント順の未決定			1									
話題内部	指摘できる箇所なし	1				1							
	思考レベル	7			7	2	1		2	5		4	1
	表現レベル		2							2	1	1	1
	指摘に伴う配慮				3	1			2			1	
	相手の反応なし									1			
	思考の停止												
切れ目の	前話題の継続			1					1				2
	話題転換	1	2	1	2	1	1		1	1		3	3
	役割の交替	2	1	1				1		2			1
	議論終了	1	1		1	1				3	2		5
特定困難												1	
合計	12	8	6	18	8	4	5	15	16	4	14	15	

グループ番号		G5-1	G5-2	G5-3	G6-1	G6-2	G6-3	G7-1	G7-2	G7-3	G8-1	G8-2	合計
開始前	個人的水準の活動	8	3	1		2	4	2	2	1		2	60
	コメント順の未決定	1	1	2		1		1		2		1	10
話題内部	指摘できる箇所なし	1		1				2		1			7
	思考レベル	3	2	1	1	8	3	1	2		7		57
	表現レベル	1				2					3		13
	指摘に伴う配慮									1			8
	相手の反応なし	1		1		1	3						7
	思考の停止					1							1
切れ目の	前話題の継続	1			1	3	3						12
	話題転換	1				2	2				5		27
	役割の交替	1	1	1		1		1			2		14
	議論終了	1		3		1		1	1		3		24
特定困難												1	
合計	19	7	10	2	22	15	8	5	5	20	3	241	

れ目」を暗示するマーカーとしても機能しており、「前話題の継続」(12回)、「話題転換」(27回)、「役割の交替」(14回)、「議論の終了」(24回)が観察された。

4.2 沈黙明け行動の種類と特徴

次に、沈黙明け行動、すなわち、「《沈黙》直後の第1発話」として、どのような種類の発話がみられたかを示す(【表3】)。【表3】より、沈黙明け行動は、読み手が行う場合が相対的に多く(150回、約62.2%)、「質問」(25回)、「感想」(17回)、「確認」(15回)、「判断」(14回)、「提案」(11回)の順で出現していた。一方、書き手による沈黙明け行動(56回、約23.2%)では、「説明(具体化・補足を含む)」(14回)が最も多く、次いで、「確認」「指摘・提案の要求」「意見・意志の表明」が同じ頻度(各5回)で出現していた。また、学習者のピア・レスポンス活動全体に出現した発

話の発話機能を分析した朴(2015)との比較から、「訂正」「返答」が少なく、「判断」「提案」「説明」「継続(非実質的発話)」が多いことを、沈黙明けという談話位置の特徴であるとして指摘した。

沈黙後という位置において「訂正」「返答」が少なかった理由としては、本発表では、出現位置による要因が強く影響していると考えられる。例えば、「訂正」という言語行動は、訂正により指摘する内容あるいは表現について、話者が正確さということに関してある程度の確信を持って行われると考えられる。しかし、沈黙には、話者が思考を巡らせ、迷ったり、悩んだり、発言を躊躇したりする過程が反映される。したがって、沈黙は、話者がある程度の確信を持っている場合に行われる「訂正」という言語行動とは性格的に合わず、むしろ、迷いを経た「判断」として表出されることが多くなると考えられる。また、「返答」についても同じように考えることができる。沈黙が意味するのは、相手に対して直ちに応答することができないという状況である。つまり、相手からの質問が難解なものであったり、答えるためには準備が必要なものであったり、あるいは、相手が言ったことに対して直ちには納得できないという場合であり、これは比較的すぐに応答できる場合が多い「返答」とは相容れない可能性がある。

4.3 ピア・レスポンスにおいて沈黙は何を意味するか

本節では、ピア・レスポンスにおける沈黙の意味について考察し、特に、沈黙がピア・レスポンスの進行上、ポイントとなる位置で現れており、「学び」の兆候となりうることを指摘する。まず、【会話例 1】で示すように、沈黙明け行動として発現した「説明」「指摘・提案の要求」「提案」「判断」を契機とする一連のやりとりが、論文の原稿の修正につながる場合がある。具体的には、授業前後に提出された論文の原稿を比較したところ、学習者は沈黙明けのやりとりを踏まえて、論文の内容や表現などの修正を行っていた。【会話例 1】では、沈黙後の、書き手による「説明」の発話が、論文の修正につながっている。この断片では、3行目の S01 による「質問」の後、5秒間の沈黙が生じている。なお、ここでの沈黙は「思考レベル」を要因とするものであり、具体的には、『ブレイクダウン』という概念について、(1) S02 が事前に調べたこと(既有知識)を思い出そうとする、(2) S01 への説明として複数の案を思いつき、そこから最適な方法を選択する、(3) 予想外の質問により指摘された事柄の重要性に気づき、対応を考え始めるなど、わずか5秒間の沈黙であるが、S02 は様々に思考を巡らせている可能性があり、S02 にとっては価値がある沈黙だといえる。そして、5秒間の沈黙の後に、S02 は『ブレイクダウン』についての説明を始めているが、すぐにはうまく説明することができず、発話の産出の修復をしたり、言い淀んだりして、まさに今、生じている状態がブレイクダウンであると述べ(6行目)、さらに、「つまり」以下で言い換えによる説明を行っている(8行目)。

S02 は、【会話例 1】のやりとりを通して、『ブレイクダウン』という用語が読み手にとって理解しにくいものであることを認識したと考えられる。ここで、このやりとりを経て、S02 の論文がどのように修正されたかを、授業前後に提出された論文を比較することによって明らかにする。S02 によって授業前に提出された論文では、『ブレイクダウン』についての説明が何もなされないままに論が展開されており、確かに言語学(特に談話分析)の知識を持たない読み手にとっては理解が困難なものになっている。一方、【会話例 1】のやりとりを経て授業後に提出された論文では、脚注に『ブレイクダウン』についての定義が付け加えられており、読み手にとって読みやすくなるように改善され

【表 3】沈黙明け行動の類型

		書き手	読み手	○(不問)	
実質的 発話	A. 質問	・質問	1	25	16
		・確認	5	15	5
		・言い換えによる確認	2	6	
	A. 要求	・指摘・提案の要求	5		
		・行為の要求	1	2	1
	B. 回答	・説明	10		
		・具体化	3		
		・補足	1		
		・意見・意志の表明	5	1	
		・返答	1	1	3
	B. コメント	・提案		11	
		・判断		14	1
		・訂正		1	
・感想			17	2	
・関係づくり		3	3	1	
・開始			2		
非実質的 発話	B. 表示	・継続	7	12	2
		・承認	5	6	
		・否認			
		・確認		4	1
		・感情		6	1
	・感想			1	
	・終了	3	7		
	・同意	3	2		
	談話表示 の発話	・話を始める		3	
		・話を再び始める		5	
・話を進める			1		
・話を変える			1		
・話題のメタ的表示		1	5		
・話を終える			1	1	
合計		56	150	35	

【会話例 1】(G1-1)

3	3	*	S01	この『ブレイクダウン』っていうのは、何ですか？
4	4-1	/	S02	えっと… 沈黙 5 秒 あ、『ブレイクダウン』と、えん、例えばあの、英語で、えー、
5	5	*	S01	うん。
6	4-2	*	S02	たぶん(少し間)これです。
7	6	*	S01	ああ、dawn。
8	7	*	S02	うん、つまり、会話#会話がうまく進められ、られ、ません、という…、<という…>{<}。

S02 の授業前の提出論文

今までの研究は、あいづちは自然談話を促すことを明らかにした。嶺川由季(2000)¹に、『ブレイクダウン』の修復にとって「ハイ」と「エエ」などのあいづちはあまり役に立たないと述べられているが、談話の成立にとってあいづちが代わりのない重要な役割を担っていることを明確に認められている。あいづちの機能だけではなく、その分類、使われる頻度、場合、対象などについての研究も非常に多い。

S02 の授業後の提出論文

今までの研究は、あいづちは自然談話を促すことを明らかにした。嶺川(2000)¹に、『ブレイクダウン』²の修復にとって「ハイ」と「エエ」などのあいづちはあまり役に立たないと述べられているが、あいづちが会話の成立にとって代わりのない重要な役割を担っていることを明確に認められている。また、村田(2000)³はあいづちが『「聞いている」』という信号・感情・態度の表示、そして turn-taking に至るまで』と指摘している。あいづちの機能だけではなく、その分類、使われる頻度、場合、対象などについての研究も非常に多い。

²ブレイクダウンというのは、意見が違う、もしくは一方が話し続けるに言い出すことなどによって、会話がうまく進められないということである。

ている。本研究の分析データでは、沈黙後に、書き手が「指摘・提案の要求」「説明」を行っている場合と、読み手が「提案」「判断」を行っている場合に、授業後の論文の原稿において修正がみられた。特に、書き手が沈黙明け行動（「指摘・提案の要求」「説明」）を行う場合では19例中4例において、読み手が沈黙明け行動（「提案」「判断」）を行う場合では25例中13例において、授業後の論文において修正が施されていた。したがって、読み手が出発点となって指摘（「提案」「判断」）を行う場合の方が、書き手を出発点とした場合よりも高い頻度で論文が修正されることが分かった。

【会話例2】(G3-2)

331	257	*	S15	《沈黙 6 秒》や、ま、それは、各自考えることで。
332	258	*	S13	はい。
333	259	*	S15	うん。
334	260	*	S15	《沈黙 5 秒》全然…、話、変わるし、あの、雑談だけ<笑い>、あの、が、が、学祭とか行く?、行ったりする?。
335	261	*	S13	え、「大学 A 祭」?。
336	262	*	S15	「大学 A 祭」や、「大学 A 祭」じゃなくて、他のところ。
337	263	*	S13	行ってないです。
338	264	*	S15	どンドン行ったほうがいいよ。
339	265	*	S13	なんか、「大学 F」の 1 回行ったことあります。
340	266	*	S15	=あ、ほんとに?。

次に、【会話例 2】で示すように、本題に関するやりとりが終了した後の（沈黙後にみられる）「アフタートーク」、すなわち、（日本語による）雑談的なやりとりにも、「学び」の機会として重要な価値があることを述べる。【会話例 2】は、S13 と S15 が論文については十分に議論し尽くしたうえで、ディスカッション活動の時間が余ったという場面で

ある。ここでは、334 行目の 5 秒間の沈黙が「議論の終了」を示唆している。その後、334 行目の S15 の発話を契機として、本筋とは関係のない雑談が開始されている。こうした雑談的なやりとりも、ピア・レスポンスの進行上、ポイントとなる位置で生じる沈黙が契機となっており、アフタートークが、過度な沈黙が生じ、雰囲気が悪化することを防いでいると考えられる。アフタートークでは、〈書き手がどのような人物か〉といった話題が中心となることが多く、参加者の興味が〈論文の内容〉から〈書き手そのもの〉に移っている¹のは、ピア・レスポンスにおいて価値のあることだと思われる。というのは、こうしたやりとりが参加者間に良い雰囲気をもたらし、また、相手を知ることにはピアを信頼することにつながるからである。さらに、アフタートークは、議論にスムーズに復帰するための下地を形成する働きもあると考えられる。今回の分析データからは、アフタートークの最中に、突然本題に復帰するような例も観察された。ピア・レスポンス活動を行う当事者が、何がメインのやりとりで、何がそうでないかを認識しており、雑談と本筋に関わるやりとりとでは、後者が無標であり、優先度も高いことが分かった。しかし、議論が終了したペアから話すのをやめるよう指示した場合、(1) 教室内が次第に静かになっていき、やりとりを続けにくい雰囲気が構築され、その結果、まだ十分に議論し尽くせていないペアが議論をやめてしまう可能性、(2) 一度議論が終了してから再度相手の意見を求めたいという場合に、会話を再開しづらくなる可能性があるため、このようなやりとりも観察されにくくなる可能性がある。

5. おわりに

本研究では、沈黙および沈黙明けという談話上の特殊な位置に注目し、①沈黙の要因、②沈黙明け行動の種類と特徴、③ピア・レスポンスにおける沈黙の意味の 3 点について、分析と考察を行った。特に、③については、参加者は沈黙を通して実に様々なことを思考している可能性が示唆された。円滑なやりとりが生じている箇所が注目されやすいピア・レスポンスであるが、沈黙は「学び」の兆候として現れる場合があり、これも重要なピア・レスポンスの構成要素の一つであるといえる。したがって、教師は、沈黙を言語活動の停滞、言い換えれば、やりとりを阻害するものとして考えるのではなく、その沈黙によって個々の参加者の思考、および、相互行為に何が起こっているかを観察し、ピア・レスポンスの進行において当該の沈黙がいかなる意味を持っているかを考えるべきではないだろうか。

参考文献

胡方方 (2018). ピア・リーディング授業の話し合いにおける司会役の役割と存在意義 一橋日本語教育研究, 6, 31-40.
 水野瑛子・柴田龍希・俵山雄司 (2019). 討論の行き詰まりに対する話題展開—日本語母語話者と中国人日本語学習者の比較—名古屋大学日本語・日本文化論集, 26, 35-55.
 武藤理恵 (2013). 言語活動における沈黙の意味—沈黙は言語活動の停滞か—言語文化教育研究, 11, 175-189.
 朴恵美 (2015). ピア・レスポンス活動における質問の機能 一橋大学国際教育センター紀要, 6, 109-121.
 滝浦真人 (2008). ポライトネス入門 研究社
 宇佐美まゆみ (2011). 改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2011 年版.
 張未未 (2018). 日本語母語場面と接触場面における雑談の話題展開の方法 早稲田日本語研究, 27, 25-36.

¹ なお、【会話例 2】では、〈書き手がどのような人物か〉(＝両者の所属・学年など)が共有できたとうえで、先輩にあたる S15 が S13 に対して、日本での留学をより充実させるための助言を行っていると考えられる。